国産豚肉 1ヵ月で12%安

卸値 感染症の影響薄れ出荷増

国産豚肉の卸値が1カ月で12%安となった。2年前に流行した感染症、豚流行性下痢（PED）の影響が徐々に薄れ供給が回復しつつある。品薄が目立った一時期ほど高値になりにくくなった。特殊な関税制度で値下がりしにくい輸入豚肉との価格差も少しずつ縮小してきた。

輸入品と価格差縮まる

国産豚肉のロースは1キロ960円程度と、2015年12月の高値に比べ21%安い。しゃぶしゃぶにも使うバラは同24%安の920円、肩ロースは同27%安の920円前後となった。豚肉ロースの卸値は15年夏に1キロ1400円台に上昇。14年夏に比べ2割高、13年夏比で4割高となっていた。

PEDの影響が薄れてきた。農畜産業振興機構によると、1～3月の1カ月あたり平均出荷頭数は前年同期比5%増の140万頭になる見通し。

輸入豚肉で最大シェアの米国産は卸価格がやや上昇した。ロース肉（冷蔵）は1キロ620円程度と、1カ月で約5%高い。15年7月から16年1月まで輸入豚肉の在庫が前年を下回る水準だ。

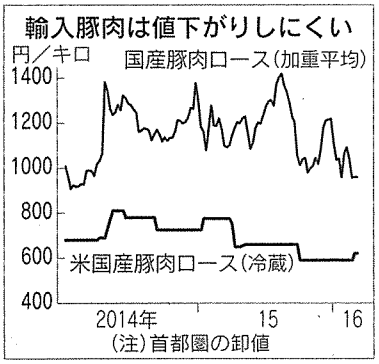
和牛が高騰し、外国産牛肉も過去の干ばつの影響などで以前より高い。相対的に安かった輸入豚肉に需要がシフトし、「一部のスーパーが特売の目玉としたことで品薄につながった」（大手食肉メーカー）。

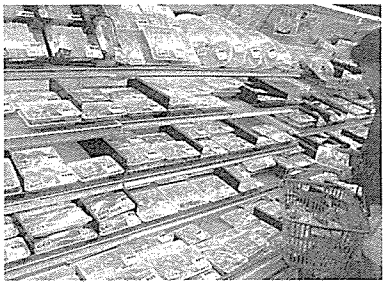
米国で豚肉は大幅に安くなった。米国農務省によると、15年12月時点で豚の飼養頭数は6829万頭と過去最大を更新した。現地の豚肉卸価格（枝肉換算）は1月時点で前年同月比14%安の100ポンド（1ポンドは約453グラム）あたり72ドルとなった。現在の為替相場では1キロ約180円となる。

一方、日本の業者による輸入価格は1キロ524円を超えたままだ。政府が差額関税制度で国内養豚業を守っており、海外相場安は日本の輸入価格に波及しにくい構図だ。1キロ524円を下回ると関税が高くなるため、業者は平均価格が高くなるよう部位を組み合わせて工夫する。

都内の大手スーパーは3月上旬、国産の豚バラ肉（一般品）を100グラム250円、米国産でエサにこだわった豚バラ肉は同200円で販売した。一時、100グラムあたり100円程度あった国産と米国産の小売価格の差が縮小した店も多い。

ミートコンパニオンの植村光一郎常務は「米国は日本市場に合わせて黒豚などブランド肉の輸出増も狙っている」と話す。高値の輸入豚肉が増えれば、「価格は高いが、品質も高い」を売り物にしてきた国産との競争が激化しそうだ。





国産豚肉は卸値が下落し特売にもかけやすくなった（都内のスーパー）